

ぐんぐんに煮過ぎたうどんの事、みんなで「ぐんぐん」って呼び

ませんか？【一本目：メロブの闖入者ども】

冷静になって考えてみると、やはりシチュエーションがエロい。

なぜ我々は違法法アップロードされたエロ同人を、ふたりして放課後の部室で黙読しているのか……？

たつきからイーダ先輩が勧めてくれた、黒沢ダイヤがポリネシアンセックスをするエロ同人を読んでる。エロい。なんだポリネシアンセックスって。初めて聞いたわ。いや、エロいんだけど、エロ同人以上にこのシチュエーションがエロい。



ポリネシアン表紙

放課後、部室、イーダ先輩、エロ同人(違法法アップロード)、ポリネシアンセックス、黙読……。やすつちい長机を挟んで斜め前に座っているイーダ先輩をちらと見やる。イーダ先輩が視線に気づいてこっちを見る。ぱちつと目が合う。イーダ先輩はニヤッと笑ってすぐに視線を手元のノートに戻した。無線マウスをスクロールさせて黙読再開らしい。

俺は黙読に戻る振りをして、視界の端でイーダ先輩をぼんやりと捉え続けていた。

肩口でパツッと切りそろえられた黒髪のおかっぱ(ボブ)というやつかもしれないが、俺は髪型に全く詳しくないのでよくわからないし、赤い葉っぱの髪留め、ところどころとしたいつも眠そうな両目、制服の赤いボン、紺色のベスト、細い腕の割には大きめの手のひら。

はい、エロアイコンの数え役満。エロい先輩とエロ同人を読むというシチュエーションのエロさ。これもうエロ同人だろ。

「ふんっ、ふんっ、ふんっ」

「めっ、めっ、めっ……」

「だっ、だっ、だっ……」

転車は、ペダルをこぐたびにギシギシと耳障りな音を立てて軋むのだ。

「ブイーンテージものじやね」

「早くメルカリで売って新しいの買え」

「もっと価値上がるまで寝かせようぞ」

信号が青に替わった。

俺とイーダ先輩は下半身の動きをおもむろに再開させる。

ギシッ、ギシッ、ギシッ

はっ、はっ、はっ、はっ、

イーダ先輩と俺が並んで漕ぐときは、いつの間にかイーダ先輩が斜め前を先行している。狭い都市部の道では、並んで走ると歩行者の邪魔になってしまう。だからといって、お行儀よく一列になって走る高校生はあまりいない。なんとなくお互いを視界に収めながら、一列になりさらない一・五列ぐらいの折衷案で、俺たちは街路の風を切る。俺のプリミアなオンボロ自転車は、ほぼ常にイーダ先輩の後塵を拝しているのだった。ギシギシ言っばかりでアンアンが無いのが寂しいところだ。

そう言えば、エロ同人の童貞ものでよくある、「気付いたらホテルにいました」的なシチュエーションってマジでありえないよね。そんなスパッとカットできるほど童貞にとって軽いプロセスではないだろう、たぶん。バスロープまで着てから「ほ、ほんとにするの?」「みたいなリアクションをするのしらじりしますげる。焦るところはその前段階だろうが。全く現実味が無いぞ。

と、と、と、おろしながらも懲りずに童貞ものをクリックして悪質サイトに飛ばされる、というのを繰り返すまでが童貞のたしなみである。知らんけど。



と、と、と、童貞

まあ、と、と、と、あえ、俺は今のメロブにイク瞬間の道程は覚えてますよ、と、童貞だけに、エロ同人特有のうるさい掛詞。

斜め前のイーダ先輩が、一瞬振り返って俺を流し見る。

ギンツ、ギンツ、ギンツ
はっ、はっ、はっ、はっ、

着。

なんだか公民館を思わせるようなレンガ張りの建物の二階。そこにお目当てのメロブはあ
る。



めろぶ

目立たないところに自転車を違法駐車して、イーダ先輩と俺はえっほえっほと階段を上った。
イーダ先輩の雰囲気とか俺の心持とかは、不思議といつもと同じような感じだった。

「……」

いや、前言撤回。先輩はともかく、やっぱり俺は緊張してるわ。部屋にいた時の混乱を微妙
に引きずったまま、頭がふわふわしている。心臓が速くなるような感じではないけれど、これ
はこれで緊張の一種だ。きつと。

イーダ先輩も緊張してるのかな。イーダ先輩は突拍子もないことをする割には、いわゆる
「常識」もそれなりに持ち合わせているから、エロシチュに意外と頭がふわふわしているのかも
しない。イーダ先輩の大胆さは肝が据わっているとはまた違っただろうな、と思っ。

入店。

何回か来たことがあるので、店内のレイアウトは見覚えがあるものだった。
てか、そんなことばどつでもよかつた。

はい、浮いている。もちろん物理的に浮いているわけちゃうよ。イーダ先輩と俺のふたり組みが
浮いてるって意味ね。というのも、店内は案の定、ソロプレイヤーばかりだったからだ。平日
のこの時間帯って、特にそうなのかな？ 普段この時間帯に来ないからわかんね。まあ、何が
とは言わんが、あんまりふたり組みではこないひとが多いかもしれないね。わかんね。

まばらに存在する三十代から四十代らしきソロプレイヤーたちのそばをふたりで通り抜けるたび、いけないことをしているような気がする。同時に、このシチュを自慢したいような気もする。そして、自慢してしまいたくなる自分に、少し嫌な気持ちを感じている節もある。この妙な後ろめたさと、見栄と内省の化合物は、取り扱い注意な代物だと俺は直観した。だから、すべさま見ないふりをした。何がと言わんが、俺たちは多分メロブの闖入者だ。

さて、入ってすぐのところにあるふつりの漫画コーナーはジャブだ。ジャブのコーナーだ。本丸はエロ同人コーナーだが、いきなり直行するのはどうにも気が引ける。ひとりならいざ知らず、今はイータ先輩も一緒にいるのだ。もうちょっく、こっく、前戯とか必要なんじゃないですかね……。童貞は気が遣えるのだ。そりゃあ、早く右ストレートを打ちたいが、意識的に今はもう少し知らないふりをします(大〇建設)。

“

ごめん、同級会には行けません。
いま、シンガポールにいます。
この国を南北に縦断する地下鉄を、私は作っています。
本当は、あの頃が恋しいけれど、でも……
今はもう少しだけ、知らないふりをします。
私の作るこの地下鉄も、きっといつか、誰かの青春を乗せるから。

しかしながら、同級会（同窓会）を当日ドタキャンしたとみられること。忙しいアピールをしているわりに、同級生からのメッセージに1分で返信していること。そして同級会に参加できないことだけを言えばいいのにもかかわらず、長めの自分語りをし始めたことから、主にTwitterや5ちゃんねるなどでネタにされ、主人公は「シンガポールマウントネキ」と呼ばれるに至った。そこから転じて、冗談交じりで誘いを断る際に「ごめん、〇〇には行けません。～（以下略）」というコピペ改変がTwitterなどでされるようになった。

と、俺がいらん気を回しているうちに、イーダ先輩はずんずんとエロ同人のコーナーに進んでいくのだった。うわあ、いくねえ〜。何か変なところで躊躇ないんだよな、イーダ先輩は。でも繰り返すけど、「このひと」常識めいた感覚は割と持っている。だから、身体は動いてるけど、内心、結構焦ってるみたいなのをよ〜く見かける。それはそれとして、何事にも先輩はあらまほしきことなり。何も考えずに俺はこのイーダ先輩の後ろについていくのだった。

うわ、表紙も背表紙もピンクっ。ピンク過ぎる。岡崎京子かよ。



あや〜、買っていないのに内容を思い出せるタイトルがちらほらあるぞ〜。不思議だな〜。徳を積みすぎで転生前の記憶が残っちゃったか〜。転生前にはこのタイトルたち出版されてないんだけども、それはもう少し知らない分りをします。

エロ同人コーナーに入ってから、俺たちはわかりやすく歩く速度を緩めていた。ゆったり回覧モードである。イーダ先輩がおもむろに平積みされている一冊を手に取って俺に見せる。でかつ(主語は勝手に補ってあげた)。

「このっの好きなのっ」

「これはね〜ちよっと違うんすよね〜」

イーダ先輩もまだまだミント検定四級である。

「そっなんだ」

「絵はいいですけど、ロングより短めの方がね、このっ、いいんすよね」

話してて思ったけど、俺、小声すぎる。店内のエアコン効きすぎて凍えてんのか？ イーダ先輩の音がよく通る分、半ば反射的にこり合いをこらうとしてる感じがあった。でもイーダ先輩の声はよく通るのでこり合いは徒労。

「確かに、ミントがすぎなやつ、みんなショートだわ」

「でこよ。そこで俺、胸はそ〜まほ〜ポインツ高くないとで」

「尻?」

「いや脚。あと膝裏」

「膝裏〜」

「ほう、なんかこのすとーんとした脚のうっつかわが見えてると、興奮するんですよ」「え、意味わからん。へんたいじゃん」

うるせえ。ポリネシアンセックス好きに言われたくないわ。冬服にマフラーを巻いた高校生が丈の短いプリーツスカート履いてる後ろ姿を想像してみ？ いいだろ、膝裏。え？ 理解できない？ ……おいおい、まだそんなこと言ってるのか？ 来いよ、「高み」へ。

「あ、ミナのおすすめ」

イーダ先輩が指す先には幾花にいろいろの短編集「丹」あか「」があった。表紙が見えるように置かれていて、幾花さんのきれいな絵がぱつと目に飛び込んできた。

「あー、お世話になってますね」と

いやその節はどーもどーも、はははは。ぱつと手に取って裏表紙を見る。うお、がっすり陰毛もいつか表紙見る。うむ、乳首。

「絵がね、いいんですよね。」の骨ばった感じと、線の細いやい」

「たしかにめっちゃ絵下手」

「あ、話もしっかり作ってるんですよ。展開のナチュラリティが妙にエロいっす」

「幾花さん、シンプルに漫画ついで」

「です。う。いやーい。う。いやーい」

「ミミックウスをひっくり返しながら絵をためつすがめつする。乳首、陰毛、乳首、脇、腰回り。

「買〜」

「……うーん、やめときます。金ないんで」

はい、ひよった。なーにが「金ないんで」だ。なんか周りからちらちら見られてるような気がして、咄嗟「今日はやめときますわ(笑)」みたいな感じで気取ってしまった……。メロブの闖入者、緊張中。いやほらあれだし。十八禁だからな、十八ちゃんになってから買った方がいいよ。ウンウン。

「先輩はどれ買っんですか」

「んー……」

イーダ先輩が目の前にあるお試し読みをすつと取ってページをめくる。

「え、「れめっちゃエロ」」

「マジですか」

覗き込んでみると、雨のバス停で、濃厚なプレイが進行している場面だった。おおお、絵がうめえ。なんか描写も凝っている。

「いやー、「れごっこ」

と言いながら、先輩はお試し本を元の場所に戻して、また別のお試し本に手を伸ばした。ギヤルものだ。表紙に「いいからちのポ貸せよ……」と書いてある。おもしろ。なんでエロ同人ってこ

う煽りが巧いのか。

「金髪すきだっけ？」

「めっちゃすきすむむ」

「これはぶーすか」

「めっちゃめかっただすね」

「読んでるんかい」

違法アップロードを読んだとはひょっととも言っていない。「のお試し読みを読んだ可能性たつてある。何もやまじいことではない。ちなみに、転生前に読んだやつなのでセーフである。

エロそうな本をイーダ先輩が取る、俺が小声でくそす、先輩が棚に戻す。周りの目を常に気にしながらも、そのサイクルを繰り返す。店内の冷房は効いているけれど、手のひらが少しだけ湿っている。手先は冷たいのに手汗が出る。じんたいのふしぎ。またの名を軽度の緊張、あるいは……なんだろっね。わからんね、エロいね。

そっぴらっしているうちにエロ同人コーナーを大体一回りした。イーダ先輩がうーんと低く唸っている。

「いいやつありました？」

「うーん、決め手にかけるかな？」

「まあポリネアンセックスな感じですわ」

「別に他のでも興奮するわい」

「例えば？」

「……首絞め」

あ、ソウスカ。ちょっとぼくそっちはわからないんで遠慮しますね。へはは。あからさまに身体を引いたら、イーダ先輩が唇を尖らせて「ぼーん」と軽く腹パンしてきた。やだなあ、何も言っていないじゃないですか？。

「今日は買っつの止めるわ」

言うのが早いかイーダ先輩はエロ同人コーナーの反対方向に足を向ける。収穫なしのようだ。もしかしたら、先輩も俺みたいにひよったのかもしれない。突拍子もない行動をとるひとはあるけれど、変なところで小心者なのだ。案外。終始イーダ先輩の後をのこのこ着いていく俺ももちろん小心者ですぞ。

「あ」

「え、なに？」

「あだしまの最新刊かい？」

俺はフンベーカーに平積み重ねられている「安達としまむら」の最新刊を一冊手に取る。そっ言えよ、今日が発売日なんだつた。つむ、買おう。金がないんじゃないのかという小言が聞こえてきそつたが、当然知らないふりをします。

「ちょっと買ってきますね」

「ほーん」

ラノベみたいなそれなりの工口々を含んだ作品は、レジに持っていくのにちょっとばかり勇気がいるのだが、今日は感覚が普段とは違うので、相対的になんか全然いけた。ラノベは十八歳未満が買っても何ら問題はないのだ。「この安達としまむらのすとーんとしたい感じの脚だって問題はない。きつと膝のうらつかわが良い感じなのだ。きつとね。」

行きは自転車を漕いできたのだが、帰りはお互いに手で押してゆっくり歩く。時間帯的に暑さのピークは過ぎてきているので、風邪を切らなくても、まだいける気温にはなっていた。それでも暑い。自転車を押しながらイータ先輩が器用にスマホをいじる。俺のスマホに通知が来た。タップして確認する。

「なんすかこれ」

「この前つごん屋で食ったつごんにゴキブリが入ってた」

「うお、や、や」

まじでちつこいゴキブリが入っている。これは災難だ。昆布か何かと間違えてそのまま食べちゃいそうなあたり、たちが悪い。

「これは金払いたくないすね」

「びっけりしすぎって何も言えんかったわ……」

「やっほり寝なや」ころで小心者である。

「ミミはつごん派？、ソバ派？」

「つごん派すね」

「おー！ わたしもつごん派。鍋に入れたつごんどのやつすき。つごん」

「つごんどのもいいですけど、俺は讃岐のガチガチの方がすきすね」

「かーっ、お前わかってないわ」

やれやれと言った風にイータ先輩が首を振る。なんでだよ、つまいだろガチガチのつごん。すだち入りのガチガチぶっかけつごんすき。

つごんダイバートが白熱しかけたところで、毎度のお別れ交差点に差し掛かった。ここから先、勤勉なイータ先輩は塾へ、急情な俺は自宅へ直行である。

「ほいじゃまた明日」

イータ先輩がしゅぼつと手のひらを顔まで挙げた。俺もそれに合わせて「うす」と気の抜けた返事をする。イータ先輩が反対方向に自転車を漕ぎ始めたのを見て、俺もオンボロライドにまたがった。ギシギシギシギシ。

部活動。イーダ先輩と俺は同じ部活に所属している。公式には週二回の活動なのだが、ここ最近、俺たちは毎日活動中だ。部活動とは全く関係のない活動しかしていないが。部屋にいたので部活動である。美術館にあれば便器でも美術品なのだ。コンセプチュアル部活動。

俺とイーダ先輩は、多分明日も部屋に行く。間違えた部屋にイクッ！

今日の事を思い出しながら、自転車を漕ぐ。放課後、エロ同人、ポリネシアンセックス、メロブ、幾花にいろ、ギャル、ゴキウどん。ハイライトはイーダ先輩とのメロブ珍道中。行為もエロいけど、エロはシチュだよね。あだしまだってそうなのだ。ソフト百合はシチュ。おっと、そんなことを考えてたら今更ながら勃ってきた。いつもと同じような感情を思い出して、不意に性的興奮が亢進する。通い慣れた道は安心感がある。やっぱり、混乱と性的興奮は別物なのかもしれないなかった。

俺の中のエロは、わりかし保守的なんだろうな、と思う。俺はぶどぶどこのうどんよりもガチガチでシコンソのうどんの方が好きなのだ(エロ同人特有のうるさい掛詞)。

(終)

